

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

「イラン近代史研究の 45 年間」

小牧 昌平(上智大学)

まずタイトルに挙げた 45 年間であるが、今から 45 年前は 1972 年である。この年は私が東京大学文科三類に入学した年に過ぎず、その意味で 45 年とは象徴的な意味でしかない。

1974 年に文学部東洋史学科に進学し、護雅夫先生のゼミに参加させていただくことになった。その一方で、第三外国語としてロシア語とペルシア語を履修した。ペルシア語は黒柳恒男先生に習った。教科書は『ペルシア語入門』(泰流社、1973)で、前年までは Lambton が使われていたので、私は日本語でペルシア語を勉強した最初の学生になる。

当時は学生運動の最末期で、卒業論文のテーマも「革命」とか「民主化」などが選ばれる傾向があった。そのため、イランを選んだ私は自ずと「イラン立憲革命」(1905~1911)を選ぶことになった。しかし、当時の日本でのイラン立憲革命史研究は惨憺たるものだった。運良くイランの改革思想家のマルコム・ハーン(1833~1908)の初期の著作集を東洋文庫で見つけた。それを中心に卒業論文をまとめた。

1978 年に修士課程に進学したのだが、その年の夏過ぎからイランで反国王政府運動が次第に全国に広がっていった。そして結局、1979 年 2 月 11 日にイラン・イスラーム革命が達成された。

修士論文はマルコム・ハーンが立憲革命期に出した新聞を中心に書いた。ここで困ったことになった。当時は博士課程に進学して初めて現地に留学に行くのが普通だったが、イランでは革命で大学が閉鎖されてしまったのである。そのため、私と同年代の多くはアメリカに留学したが、私はイラン行きしか考えていなかった。その一方で、20 代のうちに現地に行かなければならないと考えており、正直焦りを感じていた。

そうした中で、1982 年春に黒柳先生から在イラン日本大使館が専門調査員を探しているが、行かないかとの話をいただいた。ともかくイランに行けるのでお引き受けすることにした。「専門調査員」という職は 1982 年度から始まった制度で、中東はイランとイスラエルに最初に派遣されたので、私は専門調査員第 1 号である。こうして 29 歳 5 ヶ月で現地に行くことができた。大使館員並みに働かされる中、大使館に比較的近い本屋で主に書籍を購入した。

そこでは 18 世紀後半の史料が集まった。そこで、帰国してからは 18 世紀後半を中心に論文を書くようになったが、立憲革命がイラン近代史の一大事件であるという認識を変えることはできなかった。立憲革命を研究する若手ももっと出てきて、議論が活発化すればよいと考えている。